

「関係人口と共に受け継ぐ地域文化 ～福島県南会津町での調査より～」

東洋大学 国際地域学部 国際観光学科 3年

遠藤拓海

北側奈穂美

直野りえこ

橋爪駿平

矢口絵己

目次

はじめに

第一章 地域文化遺産の現状

第二章 福島県南会津町

1. 福島県南会津町

2. 大桃の舞台について

第三章 関係人口

第1節 関係人口から関与人口へ

第2節 事例研究

1. 静岡県賀茂郡松崎町石部地区と富士常葉大学

2. 香川県直島町

第四章 提案

1. 関係人口になり得る存在

2. まちなび

おわりに

参考文献

はじめに

今日、日本では国内外からも注目される有名な祭りやアニメなどのポップカルチャーが存在する一方で、衰退の一途を辿る伝統文化も存在する。そこで、ナショナル・トラスト活動を通して、失われつつある文化を活かした魅力ある地域づくりを考えていく。

ここで言うナショナル・トラスト活動とは、地域遺産を「守り」、魅力を「伝え」人や活動を通して「つなぐ」ことを指す。この活動を通して、地域内外の人々が地域遺産に関わり、人々を魅了する地域を目指す。

本研究を行うにあたって、日本で失われつつある地域文化が、南会津町には存在し続けていることを知り、実際に訪れ調査を行った。

第一章 地域文化遺産の現状

前述のとおり、日本には既に衰退した地域文化が存在するが、それらに共通する衰退要因を探るべく、2つの例を分析する。一つ目は、福岡県で行われていた牛馬祭りの例である。福岡県筑紫野市のホームページによると「牛馬は明治30年代まで農家に欠かせない機動力であった。牛馬祭りというのは、田植えの前後に行っており、感謝することを目的として、伝統行事として生活の一部になっていた。」

二つ目の例は、福井県のアッポッシャである。アッポッシャは塩瀬博子（2017）によると「継続、休止、再開を繰り返し、福井県内では6カ所実施されていたが2015年には1カ所のみで実施されている。」

また、アッポッシャとは、「あっぱ（餅）が欲しい」という言葉から来ている。内容としては、小さい子供がいる家庭を鬼が訪れ、子供を脅かしてまわる。連れていかれそうな子供の代わりに親があっぱを差し出して帰ってもらう。鬼に連れていかれずに済んだ子供は、助けてくれた親を尊敬する、ということを目的とした行事である。

これらの2つの文化が衰退している理由の共通点は「ライフスタイルの変化」、「担い手の不足」が挙げられる。ライフスタイルの変化というのは、教育観の変化や生活様式の変化、諸産業の発達等、我々を取り巻く環境の変化のことを言う。このような変化に対応し、近年、なまはげや歌舞伎が変化してきている。具体的な変化としては、なまはげを虐待行為と捉える人も現れ、以前より鬼が優しくなったという例がある。歌舞伎は、最新の舞台装置や話題性のあるテーマを取り入れた、スーパー歌舞伎を上演することで、歌舞伎離れしている現代の若者に働きかけている。

担い手不足については様々な原因があるが、特に影響を与えているのが少子高齢化と人口減少である。総務省による人口推移のグラフによれば、35年前の1980年と現在（2015年）を比較すると、高齢化率は18ポイント増加しており、35年後の2055年には65歳以上

の高齢者は総人口の39%にまで増加すると推計されている。総人口自体も、2005年をピークに減少傾向にあり、特に14歳以下の年少人口が現在（2015年）の約半分にまで減少すると推計されている。



図1. 我が国の人口の推移（総務省ホームページより引用）

このように、伝える側の高齢化、伝えられる側の減少により文化を継承することが難しくなっている。

この問題の解決策を考えるにあたり、より実現可能性を高めるために、実際にこのように高齢化や人口現象などの社会問題がいち早く進み、それにより文化遺産に手を回す事が難しくなっている地域にこの問題を落とし込んで考える。

本研究では福島県南会津町を対象として考えていく。

第二章 福島県南会津町

1. 福島県南会津町

(i) 概要

福島県南会津町は福島県の南西部に位置しており、平成18年3月20日に田島町・館岩村・伊南村・南郷村が合併して誕生した。人口は15,729人(平成30年11月1日)で、総面積は886.47km²、森林面積816.67km²となっており、町全体の約92%が森林で占められている。地形は、越後山系から連なる帝釈山を最高峰に、山々に囲まれており本庁舎の標高は

550mとなっている。気候は、夏は朝夕しのぎやすく冬は厳しい日本海型に属し、特に西部地区は特別豪雪地帯に指定されている。



図2. 福島県南会津町の位置（福島県公式ホームページより作成）

(ii) 現状

実際に南会津町に赴き、地域住民にヒアリング調査を行った。この調査を通して、南会津町が3つの問題に晒されていることが分かった。

①人口減少

南会津町は、平成18年に4つの地域が合併してできた町である。その頃の人口は約20,000人であったが、年々減少し今日では15,729人（平成30年現在）にまで減少してしまっている。また、住民票は南会津町にあるが実際には進学や就職により他の地域で暮らす若者も少なくないという事が調査により明らかになった。

②少子高齢化

前述の通り日本では少子高齢化が問題となっているが、その問題は南会津町にも当てはまる。南会津町も若者の都市部への流出や出生率の低下によって少子高齢化が急速に進み、中でも館岩地区での少子高齢化が著しく、平成30年度の小学1年生は1人しかいなかったという。また、高齢化率も日本全体の高齢化率が27%（2015）であるのに対し、南会津町は約39%（2017）と高い割合にある。

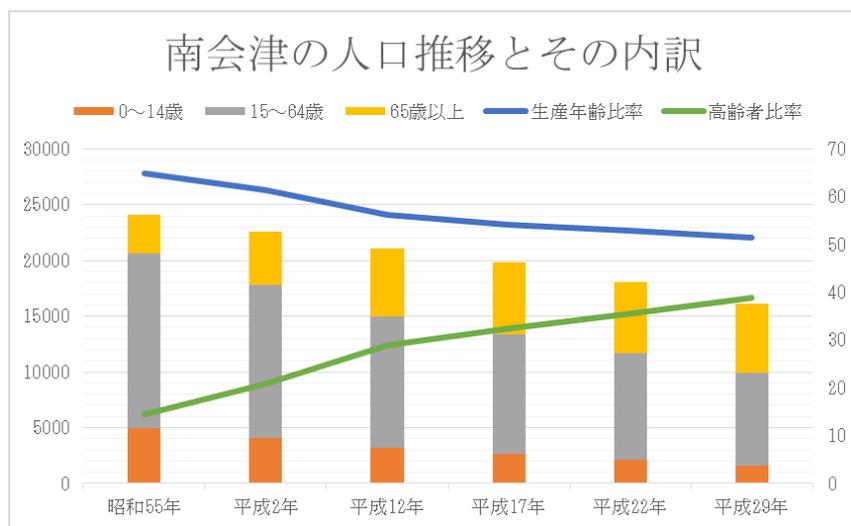


図3.南会津の人口推移とその内訳

(南会津町高齢者保険福祉計画・南会津町介護保険事業計画より作成)

③住民が地域資源の魅力に気が付けていない

この問題は、会津町で実際に観光政策に携わっている方にヒアリング調査を行った際に出てきた問題である。南会津町には、温泉資源や茅葺屋根の古民家が集まる前沢集落などの観光資源となりうる魅力的なものや場所がたくさんあるにも関わらず、町に長く住む住民にとってはそれらのものが日常化してしまっている。結果的にそれらの魅力に気づく事ができていない。また、魅力に気づけていない親が子供に「この町には何もない」と伝えてしまい負の連鎖が生まれている。

このような状態は、魅力的な観光遺産がありながらも観光客を誘致できていないという地域に共通の問題なのではないだろうか。

2. 大桃の舞台について

(i) 概要

大桃の舞台は、福島県南会津町伊南地区の駒嶽神社の境内にある。また、現在の大桃の舞台は、明治28年に再建されたものとなっており、昭和51年8月23日に国指定重要有形民族文化財に指定されている。舞台構造は、間口7.64mの奥行き8.56mで正面上部に破風があり、正面の小廂がついた切妻造で、兜造の茅葺屋根となっている。昔は舞台の花道は舞台上手に張り出してゲザと呼ぶ太夫座が常設されていたが、現在は上演時に仮設されるのみである。習芝居は明治40年に上演されたのが最後あり、以後は買芝居が上演され、農村歌舞伎が行われてきた。しかし、現在は8月に行われる「大桃夢舞台」と「鎮守祭」の

年に2回しか利用されていない。この大桃夢舞台は、年に一度8月に田島祇園祭屋台歌舞伎をはじめとする地元の郷土芸能が上演されるイベントである。当日は南会津町の特産品である手打ちそばや、鮎の塩焼きなども販売されている。大桃夢舞台は非常に人気のイベントで、毎年南会津町内外から多数の観光客が訪れている。

(ii) 現状

大桃夢舞台の歌舞伎の主体である田島祇園祭屋台歌舞伎保存会にヒアリング調査を行った結果、「今現在大桃夢舞台を行なっているが、人口減少からくる役者不足や指導員不足によりこのままいけば夢舞台の開催も難しくなる。」という事が分かった。

また、大桃に舞台がある大桃地区の区長の方にヒアリング調査を行ったところ、「南会津町は豪雪地帯で冬は雪が多く降る。雪が舞台の屋根の上に積もってしまい除雪しないといけないが、除雪作業のできる若者がおらず困っている」と仰っていた。また、「もっと大桃の舞台を活用したいが、人手が足らず何もできていない」との事だった。



図4. 大桃の舞台 (南会津町公式ホームページ)

ここまで福島県南会津町の課題として人口減少や少子高齢化、住民が地域資源の魅力に気が付けていないことを挙げてきたが、それによって文化の衰退要因である担い手の不足やライフスタイルの変化への対応ができていないという現状が見受けられた。

この問題を解決するためには担い手となる人口を増やすこと、またコミュニティの中に新たな風を吹かす存在が必要であると考えた。そこで地域外の人々を呼び込むことが最適な解決策であると考えた。

次に、解決策を考えるにあたり、担い手となる人口を増やし、コミュニティの中に新たな風を吹かすことを可能にしてくれる関係人口について取り上げる。

第三章 関係人口

第1節 関係人口から関与人口へ

総務省によると“「関係人口」とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指す言葉”とされている。ただし、この定義では“地域と多様に関わる”という部分が曖昧な点があるため、議論を円滑に進めるために再定義してみた。

まず、小田切徳美(2017)は「関係＝関心+関与」と定義しており「関係人口＝関心人口+関与人口」となる。“関心”とは心を寄せるという精神的態度であり“関与”とは係わるという実践的態度である。本研究では、地域との関わり合いの中でもより直接的に関わりを持つ「関与人口」に着目し、定義付けしていく。

地域において、あるテーマを考える際、定住人口とは「その地域に住んでいるがそのテーマに関与していない人」。関係人口は「そのテーマに実際に関与している人」で、定住の有無は問わない。また、関心人口はここには含まれない。交流人口は、「地域外の人でそのテーマに関与していない人」と、本研究では定義した。この定義に具体例を当てはめて説明していく。

新潟県関川村で毎年8月に大したもん蛇まつりという祭りが開催されている。竹と藁で82メートルにも及ぶ巨大な蛇を作り、それを担ぎ村を練り歩くという祭りである。関川村に住む人々で形成される「おりのの会」が中心となって実施されるが、村の規模は大きくないが、祭りには多くの人手を要する。そこで「ivusa」という学生団体が「新潟県関川村大したもん蛇祭り活性化活動」を実施し、運営の補助や地元の人との交流を図っている。

ここでいう関係人口は、おりのの会と ivusa を指す。交流人口は、祭りに参加する地域外の人々、定住人口とは、関係人口以外の関川村の住民を指す。

関係人口を呼んで伝統文化の衰退問題の解決に至った例を挙げ、関係人口の有用性を示していく。

第2節 事例研究

1. 静岡県賀茂郡松崎町石部地区と富士常葉大学

域学連携の事例として、静岡県賀茂郡松崎町石部地区と富士常葉大学の社会環境学部と学生ボランティアが棚田保全や町おこしに関わった事例がある。松崎町は近年、急速に高齢化が進行し、地域の特色のひとつである棚田の後継者や担い手不足に直面している。松崎町と富士常葉大学は、援農活動と地域おこし活動に取り組み、持続可能で自立した域学連携の仕組みづくりを目指した。

年間を通して行われたこの事業では、松崎町（企画観光課）と富士常葉大学だけでなく、石部棚田保存会、石部こらっしやい会、静岡県、松崎町地域おこし協力隊、NPO 棚田ネットワークなど多くの機関が関わった。ボランティア活動としては、次世代の棚田農業の担い手を育成するため、畦切や畦塗、草取りなどの棚田特有の伝統的農法を学びながら、棚田保全活動に取り組んだ。また、草取りも棚田を保全するために地域住民がもっとも必要としている日常的農作業のひとつであった。地域おこし活動としては、5月と10月に計5回の地域おこしイベントを地域と協力して実施した。中でも、5月に行われた「棚田マルシェ」では、みかんや自然薯等の地場産品から、学生達の手作りストラップやお菓子等も販売したほか、棚田で収穫された新米で作ったおにぎりや、餅を多くの来訪者に振舞い、大盛況となった。また、棚田マルシェと同時に、学生による自主企画「いっぷく亭」も開かれ、石部産の農作物を使った料理を販売し、好評であった。

これらの取り組みにおける地域側の成果としては、援農活動に加え、多様な主体が協働した新たな地域づくりの仕組みが構築され、さらには地域資源の発見や、地域おこしのためのノウハウが蓄積され、独創的な地域づくりの企画・運営が可能になったことや、地域づくりや活性化に対する認識の相違と共通点への理解が深まり、相互連携が強化されたことが挙げられた。さらには、地域づくりに対する住民意識が高まり、自主的に活動を展開する人たちも現れ始めた。また、大学側の成果としては、学生たちが主体的に企画や運営に関わることにより、責任感が芽生え、より意欲的になり、新たなプロジェクトの展開に結びついた上、異なる学年間での交流が深まったため、学年を超えてノウハウが継承されるようになった。

このように、大学と地域が関わることは、地域の人手不足等に効果的なだけでなく、学生・地域住民それぞれのまちづくりに対する意欲を増大させ、まちを活気づける。また、学生が学んでいる分野に近い取り組みをすることで双方への成果はより増大すると考えられる。

2. 香川県直島町

直島は、瀬戸内海に位置する。現在はアートの島として有名だが、人口は平成30年時点

で3,098人であり、全盛期1950年の7,800人と比較すると大幅に減少している。人口減少が課題であった島が、アートの島として有名になるまでには多くの地域外の人々が関わった。原動力としては、福武書店（現ベネッセコーポレーション（株））が大きな存在であった。福武書店は都会を目指して新しいものを作るのではなく、あるものを活かして無いものを創ることを志した。平成元年に「直島文化村構想」を立ち上げ、平成4年には「ベネッセハウス」が創設された。その後も「家プロジェクト」や「地中美術館」等の施設が次々に増えていった。中でも「家プロジェクト」では、空き家になった古民家等を改修しアーティストが作品化したもので、生活圏の中で来島者と住民が出会い、都市と地方、若者とお年寄りとが交流することで新たなコミュニティが生まれている。直島では観光客と住民だけでなくアーティストと住民が交流することにより、住民側のアートに対する理解が深まり、アーティストが島から去った後にも住民が観光客へアート作品の説明をするなど住民の関心も高まった。

こうして外部の組織や人が地域と関わることにより、観光客誘致だけでなく、住民の意識の変化や、それによる新たなコミュニティの創造が期待できる。

第四章 提案

ここまでのことを踏まえて、関与人口を呼び込む方法について提案する。

地域に実践的に関わる関与人口に成り得る存在を2主体あげる。

1.関係人口になりうる存在

(i) 大学

総務省のホームページでもの取り上げられているように、現代では大学と地域が連携してまちづくりを行う取り組みは域学連携として知られている。大学生が、ゼミやサークルといった形で地域の抱える問題に実践的に取り組むことで、地域力創造人材の育成や自立した地域づくりの促進が期待される。このように大学生を関係人口として呼び込むことは地域の発展と学生の実践的な教育の面で大いに意味を持つものである。昔からある理系の学部と地域の連携に加えて、近年では文系の学部が多様な形で地域と連携するということから生じる問題もある。大学生がどれほどの知識やスキルを持って地域と関わるかということとは多様であり、まちづくりと言っても一概に言い切ることができない。それによって、地域と大学の相互のニーズがかみ合わないことがある。このような問題を解決する必要がある。

(ii) まちづくりに参画したい観光客

もうひとつの対象となる主体は単にその町に訪れるだけではなく、その地域にもっと入

り込みたいと考えている観光客である。関係人口として初めから地域を訪れることは、その地域とそれまでなんら関わりのない人にとっては敷居の高いものではないだろうか。関与人口として呼び込むにしても、観光も兼ねてまずその地域を訪れてもらうことが現実的に関与人口を増やす方法であると考え。そこで観光と関与を同時に行う関与観光という新たな観光のあり方があれば良いのではないかと考えた。

具体例を挙げて考える。南会津町には、別名花嫁行列とも呼ばれる七行器（ななほかい）と呼ばれるイベントがある。毎年夏に行われる田島祇園祭にて未婚の女性たちが白無垢を着て行列を作り、町を練り歩くという行事である。これは未婚の女性という条件付きであり、人口が減少しているこの町で続けていくことは外部の人間なしでは難しいものとなると考えられる。そこで、外部から花嫁行列を外から見のではなく、実際に参加してくれる観光客が増えればイベントを長く続けることに大きく貢献することになるのではないだろうか。また、観光客のメリットとしては実際に体験することで、その地域ならではの楽しみ方ができると考える。

しかし、観光客からしてもその地域に行って何かできることがあるのか、何ができるのかという情報を知る必要がある、地域側もどのような人材を求めているのかを公開する場が必要となる。

この2つの主体と地域をつなげる仲介組織の設営を提案する。またこの仲介組織の活動の一つとして、各主体間のニーズを一致させるマッチングサイト「まちなび」の開設を提案する。「まちなび」には大学と地域をつなぐためのページ、観光客と地域をつなぐためのページを分ける。

2.まちなび

(i) 大学向け

大学と地域向けのページのターゲットは地域の役場、DMO(Destination Management Organization)、地域おこし協力隊など地域の活性化に携わる人々、そしてゼミやサークル活動で地域をフィールドに学ぶことを志す学生、大学の研究者である。

この「まちなび」でまず行うことは、自身の情報公開である。地域側であれば、その地域の基礎情報やその地域の課題、どんなことを目指しているのかといった情報の公開をする。大学側は、ゼミやサークルの活動内容や専門分野に関して詳しい情報を公開する。お互いが発信した情報をもとに、どの大学、どの地域と連携したいかを定めることができる。お互いが何を志しているのかを理解した上で、コミュニケーションをとることが可能になれば問題となっていた両者のニーズの不一致の問題は解決すると考える。

さらにこのマッチングサイト「まちなび」の利点として挙げられるのは、それまで一切関わりのなかった地域や大学とつながることが可能になるということだ。志が似ている者が近くにいるとは限らない。このサイトを通して自分たちのニーズに最も合う主体を新たに発見することこそが、地域のより良い発展、学生の質の高い実践的な学びにつながると考える。

(ii) まちづくりに参画したい観光客向け

観光客と地域向けのページに、地域側が観光客にイベントを作る側として参加してほしいことを掲載する。南会津の例をあげて具体的に考えていく。田島祇園祭という 8 月に行なわれている祭りは、多くの観光客で賑わう。ここでは神輿を担いだり子供が神輿の上で歌舞伎を演じたりする。観光客がその祭りで実際に神輿を担いだり、子供が歌舞伎の衣装やメイクを体験したりすることが可能になれば、観光客にとっても思い出深いものになるのではないだろうか。それだけではなく、地元住民との交流や「イベント自体を作る側に関われた」という特別感を味わえる。

もう一つの例として、大桃の舞台の活用を挙げる。大桃の舞台は、前述の通り年に 2 回ほどしか利用されていない。南会津町は、リピート率が約 7 割の観光地である。このような人々が、知る人ぞ知る南会津町の魅力を大桃の舞台を使って表現することができれば、南会津町のさらなる魅力発見につながる。

例えば、茅葺屋根の古民家が集まる前沢集落は道を挟んで向かい合う山から見下ろすことができ、その景色はまさに絶景である。10 分ほど登れば見えるこの景色も、町の人や地域をよく知る人に言われなければ気付けないような細い道を抜けた先にある。こうした魅力を大桃の舞台を通じて、発信する。町の魅力を発信する側になることで、より深く地域との交流ができる。

このように、その地域が観光客にとって第 2 の故郷になるような、そんな関係づくりのきっかけとしてこの「まちなび」を提案する。

まちなび

域学連携

関与観光

地方イベント・ニーズを探す



フリーワード 検索

場所から探す

- ・ 都道府県
- ・ 市区町村

時期で探す

- ・ 今月の開催
- ・ 来月の開催
- ・ 春
- ・ 夏
- ・ 秋
- ・ 冬

おすすめ

- ・ 家族で参加
- ・ 友達同士
- ・ カップルにおすすめ

新着ニュース

【○○祭り】今年も開催決定！
夏休みの自由研究におすすめアクティビティ 特集
<急募>○○イベントの人手が欲しいです！



図5.「まちなび」のトップページ

おわりに

今日、日本には失われつつある文化遺産が数多くある。その衰退要因は、担い手の不足、ライフスタイルの変化が主な要因である。その背景には、地域が抱える問題がある。近年、人口減少、少子高齢化、地域の魅力に気づくことが出来ないなどの問題から地域の古くから伝わる文化遺産を失いかけている地域が数多くあるのではないか。それらの問題を解決する最適な方法は、地域の抱える問題に共に向き合ってくれる存在を呼び込むことである。

関係人口として大学を呼び込むことで地域の発展、今後の地域創造人材の育成が期待される。また、ただ観光するだけではなくまちづくりにも参画する関与観光を挙げた。このような観光のあり方は、消えかけている文化の継承に貢献するのみならず、都会に人口集中する現在の日本に「第 2 の故郷をつくる」という新たな観光のかたちを提示できるのではないか。

(謝辞)

本稿執筆にあたり、多大なるご協力をくださった南会津町の皆様、柏樹良教授、ゼミナール OB・OG の皆様、そして指導教員の佐々木茂教授に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・ 田中輝美 [2017] 『関係人口をつくる』 木楽舎
- ・ 藤野公孝・高橋一夫[2014] 『CSV 観光ビジネス地域とともに価値をつくる』 学芸出版社
- ・ 平成29年度南会津観光振興プロジェクト報告書
- ・ 中塚雅也、小田切徳美[2016] 『大学地域連携の実態と課題』
https://www.jstage.jst.go.jp/pub/pdfpreview/arp/35/1_35_6.jpg
- ・ 総務省ホームページ <http://www.soumu.go.jp/> (最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 南会津町公式ホームページ <http://www.minamiaizu.org/kanko/> (最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 南会津観光物産協会公式ホームページ <https://www.kanko-aizu.com/>
(最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 財団法人 自治総合センター <http://www.jichi-sogo.jp/> (最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 南会津町の現状
<http://www.minamiaizu.org/machi/assets/2015/06/01/20150601140403.pdf>
(最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 南会津町高齢者保険福祉計画・南会津町介護保険事業計画
<http://www.minamiaizu.org/assets/2017/12/28/soan.pdf> (最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 福岡県筑紫野市「ちくしの散歩」
<http://www.city.chikushino.fukuoka.jp/furusato/sanpo74.htm>
(最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 児玉周丈[2015] 『直島における地域活性化の事例研究』
<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/graspp-old/courses/2015/documents/graspp2015-5140040-5.pdf>
- ・ 塩瀬博子(2017)
「福井市蒲生町の訪問者行事「アッポッシャ」研究—その特徴と伝承の現在—」
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/48/02.pdf>
(最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 日本ナショナル・トラスト <http://www.national-trust.or.jp/> (最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ NPO 法人 IVUSA <https://www.ivusa.com/> (最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 静岡県松崎町公式ホームページ <http://www.town.matsuzaki.shizuoka.jp>
(最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 特定非営利活動法人棚田ネットワーク <https://tanada.or.jp> (最終閲覧日 2018/11/22)
- ・ 小田切徳美[2017] 『「関係人口論」とその展開-「住み続ける国土」へのインプリケーション』 <http://www.mlit.go.jp/common/001203324.pdf>